○スルガヘウタンボクについて (籾山泰一) Yasuichi MOMIYAMA: On *Lonicera Watanabeana* Makino.

南アルプスに，スルガヘウタンボク (*Lonicera Watanabeana* Mak. 1914) というものがある。エゾヘウタンボク(*L. Glehni* Fr. Schm. 1868) に近似の一種で，それよりは，ただ，葉が狭く毛が少いのが違いのように見える。もつとも，葉が狭くなると，それに伴つて，葉末がより長く漸尖し葉脚が尖るようにもなるけれども，多くの標本が集つて来ると，葉脚がくりこんでいて葉裏に毛の多い，エゾヘウタンボク類似の形なども出て来て (国立科学博物館標本 n. 79768)，葉形や毛の多少などで両種をわかつのはかなり困難になつて来る。一方，北地のエゾヘウタンボクにも葉形や毛の少いことにおいてスルガヘウタンボク類似の葉をもつものもあり，腺毛の多少なども区々であつて，その点でも両者の間に区別はつけがたい。果実は，スルガヘウタンボクでは，両岐するものが多く，果実上の蕚も互に離在して側方を向いているというけれども，多くの箇体を見れば，果実癒合の程度も区々であつて，これを以てエゾヘウタンボクとの間に判然たる境を引くこともできない。スルガヘウタンボクで果実の高くまで癒合しているものも稀ではなく，蕚も，それに伴つて，互に接近して上の方を向いて来るから，そうなれば，エゾヘウタンボク類似の果形にもなつてしまうし，一方，エゾヘウタンボクで果実の分離するものもあるのを見れば，果実の特徴によつて両種をわかつことも不可能である。スルガヘウタンボクの花はまだ見得ないが，苞の長短も，エゾヘウタンボクでは，変るし，小苞の有無，大小，癒合の程度なども区別の不明瞭な場合が多い。結局，スルガヘウタンボクをエゾヘウタンボクから種別するに足る，よい特徴はどこにも見出しがたいということになる。そこで，これを別種とするよりは同種中のものとするのが妥当なように考えられる。思うに，スルガヘウタンボクは，いわゆる残存植物のひとつであつて，それは，そのかみ，北地から本州中部山地にまでひろく分布していたエゾヘウタンボクの，いわば，断片のようなものに他ならないといい得るかと思う。

○新歸化植物 (奥山春季) Shunki OKUYAMA: Some naturalized plants to Japan.

コモチナデシコ (*Dianthus prolifer* L.) 図. D.

昭和 28 年 3 月博物館の腊葉展の折，滋賀県の橋本忠太郎氏より送られたナデシコの一品があつたが，最近種名をつきとめる事が出来た。同氏のラベルのノートには産地として近江国蒲生郡鎌掛村東出，昭和 27 年 5 月 5 日採集とあり，“鎌掛村瀬川喜久次氏宅の畑に出来たもので恐らく鶏の餌に混じて来たものと思われる帰化植物，花は桃色で甚だ小さい”とあつた。標本は開花中のものであるが一見花弁が無い様に見える。乾膜質で長さ 15～18 mm ある筒状の蕚の先端から僅かに出ているだけで先端が浅く切れこんでいる。原産はヨーロッパでアメリカには古くから帰化しており日本へは最近入つて来る他の帰化植物と同様アメリカ経由のものと考えられる。博物館には明治 40 年